慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	周瑜描写の踏襲に関して：『三国志平話』から『三国志演義』へ
Sub Title	The portrayal of Zhou Yu : from Sanguozhi Pinghua to Sanguozhi Yanyi
Author	伊藤, 晋太郎(Ito, Shintaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.69- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

周瑜描写の踏襲に関して

――『三国志平話』から『三国志演義』へ――

伊藤　晋太郎

一

三国時代の呉は、孫堅・孫策・孫権の父子三代にわたってその基が築かれたが、孫策・孫権の二代に仕え呉の草創期に大きな貢献をなしたのが周瑜である。その伝記である陳寿『三国志』呉書の周瑜伝及びその裴松之注によれば、十代の頃より親交の厚かった孫策に従って江東平定に活躍し、孫策の急逝後はその弟孫権を守り立て輔佐した。早くから最大の実力者曹操への対抗策において卓見を示し、特に建安十三年（二〇八）、赤壁の戦いで曹操軍を打ち破り、曹操の天下統一への夢を潰えさせたことは有名である。赤壁の勝利の後、曹操軍の残留部隊が守る南郡を攻めて陥落させ南郡太守となったのだが、建安十五年、益州平定の途上に病死した。三十六歳の若さであった。

小説『三国志演義』（以下『演義』と略す）においても周瑜は重要な登場人物の一人である。周瑜を描くにあたって、『演義』が材料としたのは正史である陳寿『三国志』及びその裴松之注の記述だけではない。中でも三国興亡の一部始

終を扱ったものとしては『演義』の前段階にあたる『三国志平話』（以下『平話』と略す）の周瑜描写は、『演義』の周瑜描写に大きな影響を与えた。この点については従来の研究でも指摘されてきた通りである。しかし、その一方で『演義』に採用されなかった『平話』の周瑜描写があることも確かである。

そこで本稿では、『演義』に踏襲された『平話』の周瑜描写と、踏襲されなかったそれとを見ていき、なぜ踏襲されたのか、またなぜ踏襲されなかったのかを考えてみたい。劉備や曹操、あるいは劉備の軍師諸葛亮を軸に物語が展開する『演義』において、周瑜は決して中心的人物ではない。しかしそれなりに重要な役割を割り振られた人物であることは否定できず、周瑜描写について検討してみる意義は十分にあるだろう。それによって、『演義』の人物描写の仕組みの一端を明らかにすることもできると考える。

尚、本稿では『演義』の周瑜描写を検討するにあたって、現存する最古の版本である嘉靖本を用いた。(1)

二

まず、『演義』に踏襲された『平話』の周瑜描写について見ていきたい。

『平話』を踏襲した周瑜の描写としては、例えば赤壁の戦いの際に、諸葛亮に二橋のことを持ち出されて開戦を決意する叙述、曹操方の説客蔣幹を逆利用して曹操軍の武将を除く知略、曹操軍を破る方策を掌に書く着想、苦肉の計に見せる知謀などが挙げられる。また従来の研究でも、井波律子氏は諸葛亮に翻弄される道化のような周瑜の描写が『平話』から受け継がれたものだと述べ、(2) 白雪梅氏は『三国志』呉書の周瑜伝に見られる周瑜の上表が、(3)『平話』以来、周瑜を劉備集団に最も敵対する人物として仕立て上げさせることになったと指摘している。(4)

本稿では、これまであまり詳細に取り上げられることのなかった周瑜というキャラクターの特徴ともいうべき精神的ショックにより矢傷が破れて倒れる描写について検討していきたい。後でも述べるように、『演義』の周瑜描写がいかに『平話』の影響を強く受けているかをこの描写が顕著に表しているからである。

周瑜が矢傷を受けたのは、赤壁の戦いの後、曹操軍が守る南郡を攻めた時である。このことは陳寿『三国志』呉書の周瑜伝にも見える通りだが、[5]『演義』では次のように描かれている。

周瑜は城門が大きく開かれ、城壁の上にも人がいないのを見て、城を奪うよう命じた。数十騎が先頭に立って駆け込み、周瑜も後ろから馬の手綱をゆるめ鞭を加えて、甕城に突入した。（中略）拍子木の音一声、両側から射手が一斉に矢を放ち、まるで驟雨のように降り注ぐ。先を争って城門を入った者は、みな落とし穴に落ち込んだ。周瑜が急いで馬首を返そうとした時、矢が右わき腹に命中。周瑜はもんどりうって落馬した。（中略）徐盛・丁奉が周瑜を救い出して陣中に運び、軍医を呼んで鉄鉗子で鏃を引き抜いた。（中略）医者が言うには、「鏃に毒がついていたので、すぐには治りません。激しく怒れば傷口はまた開きます」とのこと。[6]（巻十一第二則「諸葛亮一気周瑜」）

『平話』[7]でも赤壁の戦いの後、交戦中に矢に当たったことが見える。

呉の将と曹璋は対陣し、長時間交戦したが、勝負はつかなかった。（中略）周瑜はまた曹璋を追った。曹璋が矢を放つと、周瑜に命中し、周瑜は馬から転げ落ちた。呉軍の面々でなければ、周瑜は捉えられているところだ

った。[8]（巻中第二十葉裏）

さて、矢傷が破れる周瑜の描写であるが、最初に『平話』の方を見ていこう。『平話』では周瑜は合わせて五回、精神的ショックによって矢傷が破れ、時には卒倒している。そのあらましは以下の通り。

① 諸葛亮が夏口四郡を献じてきたことを周瑜が不審に思っていると、数日もせずして、劉備と諸葛亮が荊州を守備しているという報告が入り、周瑜は一声叫ぶと矢傷から血が流れ出た。諸将は、「荊州は呉の土地だ」と言い、周瑜は即座に軍を率いて荊州に向かった。（巻中第二十葉裏）

② 荊州に着いた周瑜は、荊州を占領した劉備を責める。しかし劉備は、「私には関係ないことです」と笑っている。門旗が開き、荊王の長子劉琦が現われたのを見て、周瑜は一声叫んで落馬する。諸将が周瑜を馬に乗せるが、矢傷からは血が流れている。劉琦が、「父が亡くなってから、弟の劉琮は荊州を曹操に献上してしまいました。曹操が退いたので、皇叔（劉備）がこうしてまたこの劉琦を立てて下さったのです」と言うと、周瑜は反論することが出来なかった。（巻中第二十葉裏、第二十一葉表）

③ 三か月後、劉琦が死んだことを知った周瑜は、荊州に出陣する。出馬した劉備に対して周瑜が、「さきに荊州は我々呉の領土に属したにもかかわらず、あなたが占領してしまうとは」と言うと、諸葛亮は、「そなたにある物をお見せしよう」と言い、両陣の間に卓を置きその上に赤い盆を置いたが、その盆の上は錦でおおってあった。周瑜はそれを見て地団駄ふみ、血が泉のように湧いた。諸将が助けて矢傷に薬を貼った。盆の上にあったのは、劉備の荊州領有を認める朝廷からの文書であった。（巻中第二十一葉表）

④　孫権の妹を劉備に嫁がせ、それに乗じて劉備を殺し荊州を奪い取ろう、と周瑜は考える。しかし周瑜の策略はことごとく失敗し、劉備夫妻は長江を渡って荊州に帰ろうとする。周瑜は帰還を阻止しようと兵を率いて夫妻の車の前に進み出る。孫夫人は、「母と兄が荊王に長江を渡らせるのですから、ただちに船を用意するべきではありませんか」と言う。周瑜が、「劉備は恩に負いた賊ですぞ」と叫ぶと、夫人は笑って周瑜に車中をのぞかせた。周瑜は一声叫ぶと矢傷から血が泉のように湧いた。諸将が周瑜を扶け起こし、孫夫人と劉備は北岸に渡った。周瑜は病に伏せること数日、「夫人はわざと劉備を逃がしおった」と言った。（巻中第二十三葉裏）

⑤　西川（益州）の劉璋に呉侵攻の動きが見えたため、孫権は食糧援助と引き換えに荊州の劉備に道を借り、周瑜に西川攻略を命じた。周瑜は数日で西川との境に至った。出会った敵の官吏で、降らなかった者はすぐさま殺した。ところが張飛の軍が周瑜の軍の後を襲い、周瑜が奪ったところの州・府・県・鎮は、ことごとく張飛の手に帰してしまった。周瑜は、「これが牛飼いの田舎者の計だったのか」と言うや、矢傷が怒りのために破れた。周瑜は巴丘城で病に伏せった。（巻下第一葉表）

周瑜は⑤の直後に死ぬ。因みに⑤に見える「牛飼いの田舎者」（原文は「牧牛村夫」）とは諸葛亮のことを指している。このように周瑜が諸葛亮を田舎者呼ばわりする描写については後で触れる。以上が『平話』に見られる周瑜の矢傷が破れる描写である。

一方、『演義』における周瑜の矢傷が破れる描写であるが、こちらはその回数が五回から三回に減っている。

①　南郡の守将曹仁を破り、南郡城を占領しようと城下までやって来た周瑜であるが、すでに劉備の軍に横取りされていた。周瑜は怒りを抑えてひとまず退却し、荊州・襄陽を取る相談をする。しかし、荊州・襄陽の双方ともすで

に諸葛亮の計によって劉備軍の手に落ちたとの報せが入る。諸葛亮の手口を知った周瑜は大きな叫び声を上げ、矢傷が裂けた。その後しばらくして周瑜はようやく意識を取り戻した。（巻十一第二則「諸葛亮一気周瑜」、第三則「諸葛亮傍略四郡」）

② 周瑜は、劉備を孫権の妹の婿として呉に招き、獄中に幽閉して荊州と交換するという策略を考える。しかし諸葛亮のために事は成就せず、荊州を奪えないばかりか、孫夫人ともども脱出されてしまう。周瑜は自ら水軍を率いて追うが、劉備軍の前に大敗。敵兵たちに、「周郎の妙計高策、夫人を取られ、人馬を失い」と囃し立てられたので、周瑜は岸に上がって再度決戦しようとしたが、武将たちに止められる。周瑜は、「わが殿に会わせる顔がない」と思って、大きな叫び声を上げたので矢傷が裂け、船上に倒れる。諸将がこれを救うが、早くも人事不省。（巻十一第十則「諸葛亮二気周瑜」）

③ 西川の地を手に入れたら荊州を呉に返すと言う劉備に対し、周瑜は劉備の代わりに西川を攻略し荊州と交換したいと申し入れる。が、実はその際に通り道となる荊州を奪ってしまおうという策略であった。周瑜は兵を率いて荊州にやって来るが静まり返っている。荊州城の物見櫓に現われた劉備の武将趙雲は、諸葛亮がすでに周瑜の計を見抜いていると告げる。これを聞いた周瑜が馬首を返したところへ、四方から無数の軍馬が殺到し、いずれも周瑜を捉えんと言っているとの報告。周瑜はこれを聞いて大きな叫び声を上げると、矢傷がまた破れて馬から墜ちた。（巻十二第二則「諸葛亮三気周瑜」）

以上が『演義』における周瑜の矢傷が破れる描写である。『演義』で矢傷が破れる描写の回数が三回に減ったのは、『平話』に「諸葛三気周瑜」[9]という語が見えるためであろう。ここでの「三」は文字通り「三回」と解するよりも、「し

ばしば」「何度も」の意と解するべきである。だから「諸葛亮は何度も周瑜を怒らせた」と読むのが正しい。現にこれまで見てきた通り、『平話』において周瑜は五回諸葛亮に対する怒りのために矢傷が破れている。しかし、『演義』ではこれを文字通り「諸葛亮は三回周瑜を怒らせた」と読み、諸葛亮が周瑜を怒らせる場面を三回設定[10]して、最後に周瑜が矢傷破れて倒れる描写を持ってくることで、それぞれのエピソードのしめくくりとしたと考えられる。

五回から三回に減ったにもかかわらず、『演義』がいかに『平話』の周瑜描写に強く影響を受けたかを、これらの矢傷が破れて倒れる描写が象徴していると考える理由は、『演義』に次のような場面が見られるからである。

赤壁に曹操を破る直前、火攻めの準備を万端に整えた周瑜は、曹操の陣中で中央の黄色い旗が風に吹き折られるのを見た。

周瑜は大いに笑って言った。「曹操を破らないうちから、向こうには不吉の兆しじゃ。」曹操軍では中央の旗が折れるのを見て、みな驚き惑った。曹操は元来こういうことを好まなかったので、衆を惑わす者は斬ると命令を出し、ようやく軍心は定まった。周瑜がこのありさまを見ていたおりしも、にわかに狂風が大いに起こり、眼下で長江の荒波が岸に打ちつけるや、一陣の風が吹きすぎ、旗の端が周瑜の顔をなでた。周瑜はとっさに何事かを思い、大きな叫び声を上げると、あお向けに倒れた。口からは鮮血を吐いている。諸将が大いに驚き、急ぎ助けた時には、すでに人事不省[11]。（巻十第六則「曹操三江調水軍」）

周瑜が倒れた原因は、火攻めに必要な風の向きが逆であることに気づかされた精神的ショックである。赤壁の戦いの

時のエピソードであるから、この場面では周瑜はまだ矢傷を負っていない。しかし、「大きな叫び声を上げ」て倒れるという表現は、赤壁後に見られる一連の周瑜が倒れる描写と同じである。先に見た通り、『平話』には周瑜の矢傷が破れる描写がたびたび出てくる。『演義』の作者にとって、それらの周瑜描写の印象が強かったのだろう。周瑜が倒れる描写をこの場面で入れていることにそれが顕著に表れているといえる。まだ矢傷を負っていないのだから、ここで周瑜が叫び声を上げて倒れる描写を挿入するのは一種のフライングともいえまいか。

三

続いて『演義』に踏襲されなかった『平話』の周瑜描写について見ていこう。

前節で挙げた描写にも出てきたが、『平話』には周瑜が諸葛亮のことを罵って、「荘農」「牧牛村夫」などと田舎者呼ばわりする描写がしばしば見られる。それらは以下の如くである。

① 曹操がいよいよ呉に攻めてくることになり、孫権は周瑜を元帥に任じようとするが、周瑜は妻と歓楽に耽っていて召還に応じない。孫権は魯粛と諸葛亮を周瑜の滞在する予章に派遣する。周瑜は諸葛亮をもてなし、酒が終わると橙が出た。諸葛亮は立ち上がって左手に橙を、右手に刀を持った。魯粛が非礼だと咎めるが、周瑜は、「わしは諸葛亮殿が微賤の出で、もとは農家の人（原文は「荘農」）だと聞いている。それゆえ不慣れなのだ」と言う。諸葛亮は橙を大・中・小の三片に切り刻み、それぞれを曹操・孫権・劉備に例えて周瑜を説得する。（巻中第十六葉表）

② 赤壁の戦いの後、周瑜は夏口四郡に兵を進めて曹璋と戦うが優勢を得られなかったため、劉備に援軍を要請する。自ら行くという劉備を制し、諸葛亮は張飛に計を授けて派遣した。張飛が到着して陣を構える。周瑜が張飛を

見れば、その背後の旗に「車騎将軍」と書いてあった。周瑜は、「わしを怒らせるとは。牛飼いの田舎者（原文は「牧牛村夫」[12]）め、ことさらにわしを愚弄しおって。わが主孫権殿の官位は張飛ほどだというのか」と言って、心中憎んだ。（巻中第二十葉裏）

③ 周瑜は劉備から荊州を奪い取ろうと、旅商人に扮して荊州城に入ろうとするが、すでに諸葛亮に見破られていて失敗。周瑜の軍は敗走し、荊州から二十里のところで船を下りて馬に乗り換えたところ、伏兵が現われた。周瑜は、「またもや田舎者（原文は「村夫」）の計にかかった」と言い、敵陣を突破して逃げた。（巻中第二十一葉裏）

④ 西川攻略のため食糧援助と引き換えに荊州に道を借りようとした周瑜であったが、その軍の前に劉備と諸葛亮が立ちふさがる。諸葛亮は言った。「貴殿は荊州がここ三年の間凶作であることはご存知でしょう。今年の作物も八月半ばまでに収穫が終わってしまいました。両軍合わせて十万の軍勢が東西三十里、南北八十里にわたって戦闘を繰り広げれば、兵によって田畑がそこなわれてしまいます。これは民が遠く荊州まで赴いて願い出てきたことなのです。」周瑜が、「先に糧食百万石を納めて道を買った上で西川を攻めるのですから、もちろん田畑だってそこなわれます。軍師殿は若いころ農夫（原文は「荘農」）だったゆえ、田畑がそこなわれるのを見ると気を揉まれるのでしょう」と言うと、諸葛亮は、「そなたは魯粛殿の話を聞いていないのか」と声を荒げた。周瑜は反論することが出来なかった。（巻下第一葉表）

⑤ その後西川への進軍を強行した周瑜であったが、張飛が周瑜の攻め取った州・府・県・鎮を奪ってしまった。周瑜は、「これが牛飼いの田舎者（原文は「牧牛村夫」）の計だったのか」と言い、矢傷が怒りで破れた。（巻下第一葉表）

以上が『平話』に見られる周瑜が諸葛亮を田舎者呼ばわりする描写であるが、『平話』で諸葛亮を「村夫」呼ばわりするのは実は周瑜だけではない。曹操や孫権、さらに最初の頃は張飛さえも諸葛亮を「村夫」呼ばわりしている。[13] よって、これらの諸葛亮が田舎者呼ばわりされる描写は、周瑜描写というよりも諸葛亮描写といった方が適切であろう（ただし、周瑜が最も多く田舎者呼ばわりしていることもまた事実である）。

しかし、次に挙げるいくつかの『平話』の叙述をも合わせて考えてみると、『平話』の周瑜描写の特色ともいえるある仕組みが見えてくる。

① 周瑜は、孫権の妹を劉備に嫁がせるという名目で荊州に送り込み、劉備を暗殺するという計略を考える。孫権は縁組のことを母親の太夫人に伝える。太夫人は言った。「そなたたちの祖父はもともと農家の者（原文は「莊農」）でしたが、祖先が陰徳を積んだおかげで、あなたの父上は長沙太守となりました。このたび皇叔と縁組するのに、何の不満がありましょうか。」孫権は母親に、これが実は周瑜の考えた劉備暗殺のための計略であることを告げる。太夫人はこのことを娘に問うた。娘は、「父上は董卓を破りましたが、私も今劉備に嫁ぎ、これを暗殺して後世に名を残したいと思います」と言った。（巻中第二十二葉表）

② 荊州へ着いた孫権の妹は、諸葛亮から庁舎内に掛けてある図像を見せられた。それは高祖から献帝に至るまでの二十四人の天子の像であった。孫権の妹は、「私の家はもともと農家（原文は「莊農」）の出身ですから、このような天子の肖像は見たことがありません」と言って喜んだ。（巻中第二十二葉裏）

③ 劉備と夫人は回面の礼（新婚夫婦が新婦の実家を訪れる礼）のため呉に赴くことになる。孫権は、劉備が呉に来たら殺すつもりだと太夫人に告げる。太夫人は、「そなたのお爺さまは瓜を育てることを生業としていました。そな

たの家はもと農家（原文は「荘農」）であったのに、後に大軍を統率するようになったのは、祖先が陰徳を積んだおかげじゃ。そなたの妹が皇叔に嫁いで妻となったというに、そなたが皇叔を殺したら、そなたの妹は誰に嫁ぐことになるのかえ。皇叔がいらっしゃったら、よくおもてなしし、もし皇叔が不仁であったならば、それから殺しても遅くはないでしょう」と言い、孫権は母の言に従った。（巻中第二十三葉表）

つまり、『平話』においては孫氏が微賤の出であることが強調されているのである。従って『平話』の周瑜は、諸葛亮のことを「荘農」と蔑視していながら、「荘農」である孫氏に仕えるという自己矛盾を抱えていることになる。このような構造を持った描写によって何気に周瑜を揶揄する形になっているキャラクター設定はなかなか面白く、前節で取り上げた矢傷が破れる描写と並んで、『平話』の周瑜描写の大きな特色といえる。

ところが『演義』では、このような矛盾を抱えたキャラクター設定は踏襲されていない。周瑜が諸葛亮を田舎者扱いする描写でさえ次に示す一例のみである。

① 諸葛亮に南郡ばかりか、荊州・襄陽をも横取りされたショックで、周瑜の矢傷が破れた直後のこと。

さて周瑜は諸葛亮が呉の力を借りて荊州を横取りしたと聞いて、どうして怒らずにいられよう。怒りによって矢傷が破れ、しばらくしてようやく意識を取り戻した。諸将みなが周瑜の目の前にいて城の囲みを解くことを勧めたが、周瑜は大いに怒って言った。「諸葛亮の田舎者（原文は「村夫」）めを殺さずして、どうしてわしの怨みが晴れようか。程普殿、力をお貸し下され。いま兵を進めて南郡を攻め、きっと呉に奪い返してみせる。これがわしの願いだ。」[14]（巻十一第三則「諸葛亮傍略四郡」）

結局、やって来た魯粛によって周瑜はなだめられることになる。

四

本稿では、『演義』に踏襲された『平話』の周瑜描写と、『演義』に踏襲されなかった『平話』の周瑜描写とについてそれぞれ見てきたが、最後にそれらがなぜ踏襲されたのか、またなぜ踏襲されなかったのかを考えていきたい。

『演義』に踏襲された『平話』の周瑜描写としては、周瑜の矢傷が破れる描写を取り上げた。作者がフライングをしてしまうほどこの描写が『演義』に強い影響を与えたことは先に示した通りである。このような描写を繰り返すことで周瑜の興奮しやすいヒステリックな精神的弱さや、諸葛亮に全てを見破られるという諸葛亮に対する知的劣等性が強調されている。[15] それによって周瑜を揶揄し貶める効果がある。

一方、『演義』に踏襲されなかった『平話』の周瑜描写として、「荘農」孫氏に仕えながらも諸葛亮を「荘農」と侮蔑するという矛盾を抱えたキャラクター設定を取り上げた。このような描き方によって、何かといえば人を「荘農」などと罵る周瑜の品のなさが示されると同時に、自分もまた「荘農」の下にいる立場であることに気づかない周瑜の浅薄さも表現されることになる。よってやはり周瑜を揶揄し貶める効果がある。

この両者とも『平話』における周瑜のキャラクターを特徴づけている描写といえるが、それにもかかわらず前者が『演義』に踏襲され、後者がされなかったのはなぜか。

その理由の一つは、『演義』全体に貫かれている歴史志向の強さである。[16] 『平話』や雑劇と違い、知識人好みに改変さ

れた『演義』は、その内容を「史実」（史書の記述）に近づけようとした。そのため「史実」と矛盾するエピソードは採用されない傾向にある。

この点から二つの周瑜描写を見てみると、『演義』に踏襲された矢傷の破れる描写の場合、矢傷が破れたという記載そのものは陳寿『三国志』にないものの、前述したように周瑜が交戦中に矢傷を負ったという記載はある。よって、矢傷が破れるということがあったかもしれないと想像して物語を組み立てる際の根拠となる。実際『演義』において、史書の中で簡単にしか書かれていないことを、そういうことがあったとしても不思議はなかろうと話をふくらませている例が多いことは、指摘されている通りである。[17]

しかし、『演義』に踏襲されなかった自己矛盾を抱えている周瑜のキャラクター設定の方は事情が違ってくる。諸葛亮が劉備に仕える前に自ら田畑を耕していたことは陳寿『三国志』蜀書の諸葛亮伝に見える通りだが、[18]孫氏がもと農民であったとは『三国志』に記されていない。『三国志』呉書の孫堅伝の裴松之注に引く『呉書』によれば、孫氏は代々呉郡の役人であった。[19]それゆえ「史実」に従う限り、自己矛盾を抱えた周瑜のキャラクター設定というものは成り立たなくなってしまうのである。

さらにもう一つ、『平話』の周瑜描写が踏襲されるか否かの基準となった『演義』の基本路線がある。従来の『演義』の周瑜像に対する研究では、主に諸葛亮との関係について論じられることが多かったが、論者が一様に指摘するのは、周瑜が諸葛亮の引き立て役になっているという点である。[20]『演義』では諸葛亮の知恵や洞察力および品格を際立てるために、周瑜が知的かつ人格的にいかに劣った人物であるかを描いており、周瑜を貶めることによって諸葛亮を持ち上げる手法をとっている。この基本路線に則って、嫉妬深い周瑜という性格の改変がなされ、本来は周瑜の逸話であったも

のが諸葛亮のそれに転化されることになったりもしたのである。[21]

これを踏まえて本稿で取り上げた二つの周瑜描写を見てみると、まず周瑜の矢傷が破れる描写は、先に述べたように周瑜を貶める効果があるので、この基本路線に適っている。よって『演義』に踏襲されて、『演義』においても周瑜のキャラクターを特徴づける描写になった。

一方、自己矛盾を抱えた周瑜のキャラクター設定もやはり周瑜を貶める効果があるので、『演義』に踏襲されてもよさそうなものである。だが、このキャラクター設定を踏襲することは、周瑜に諸葛亮を田舎者呼ばわりさせることになるため、諸葛亮を卑しめてしまうという結果をもたらす。『演義』では、いくら周瑜を貶める材料になるとはいえ、同時に諸葛亮をも貶めることになる描写は採用できなかった。周瑜が諸葛亮をただ一度「村夫」呼ばわりしているところに、『平話』の影響をわずかに見出せるのみである。

ただし、『演義』には赤壁の戦いの場面で次のような描写がある。いよいよ曹操を火攻めにせんと出撃の時機を窺う呉軍の面々。諸葛亮が東南の風を吹かせ最後の懸念も晴れるが、諸葛亮の能力を恐れた周瑜は二武将を派遣して諸葛亮の命を絶とうとする。しかしすでにこれを見抜いていた諸葛亮に逃げられたと報告を受けて、

> 周瑜は大いに驚いて言った。「やつはかようにして、わしを日夜不安にさせるのか。目下のところは、曹操と連合して、まず劉備と諸葛亮を擒とし、後の患いを絶っておくにしかず。[22]」（巻十第七則「七星壇諸葛祭風」）

もちろん曹操と手を結ぶことはなかったが、いままでさんざん努力して曹操を倒す準備をしてきたのは何だったのか

と思わせるセリフである。人を「荘農」と侮りながら「荘農」に仕えているという自己矛盾を抱えた設定こそは踏襲されなかったものの、浅はかな周瑜というイメージ自体は『演義』にも継承されているのである。

注

（1）影印本『明弘治版三国志通俗演義』（新文豊出版、一九七九年）及び排印本『三国志通俗演義』上下（上海古籍出版社、一九八〇年）を参照した。また訳書として立間祥介訳『三国志演義』上下（奇書シリーズ、平凡社、一九七二年）も参照したが、これは嘉靖本の翻訳ではないことを断っておく。

（2）井波律子『三国志演義』（岩波新書、岩波書店、一九九四年）一六八―一七二頁。

（3）「備詣京見権、瑜上疏曰、『劉備以梟雄之姿、而有関羽・張飛熊虎之将、必非久屈為人用者。愚謂大計宜徙備置呉、盛為築宮室、多其美女玩好、以娯其耳目、分此二人、各置一方、使如瑜者得挾与攻戦、大事可定也。今猥割土地以資業之、聚此三人、俱在疆埸、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也。』」とある。尚、本稿では陳寿『三国志』の引用にあたって、陳寿撰・裴松之注『三国志』全五冊（中華書局、一九九八年（一九五九年初印））を用いている。

（4）白雪梅「孫劉聯姻故事的演変」（周兆新主編『三国演義叢考』北京大学出版社、一九九五年）。

（5）瑜与程普又進南郡、与仁相対、各隔大江。（中略）瑜親跨馬擽陳、会流矢中右脅、瘡甚、便還。後仁聞瑜臥未起、勒兵就陳。瑜乃自興、案行軍営、激揚吏士、仁由是遂退。

（6）瑜見城門大開、城上又無人、指点衆軍搶城。数十騎当先而入、瑜在背後縦馬加鞭、直入甕城。（中略）一声梆子響、両辺弓弩手一斉発、勢如驟雨。争先入門的、都顚入陥馬坑内。瑜急勒馬回時、被一弩箭正射中右肋、翻身落馬。（中略）丁・徐二将救了周瑜到帳中、喚行軍医者用鉄鉗子鉗出弩箭頭来。（中略）医者言曰、「此箭頭上有毒、急切不能痊可。若怒気沖激、其瘡復発。」

（7）『平話』は現在では日本の国立公文書館内閣文庫蔵の『全相平話五種』に収められたものしか伝わっていない。本稿では、影印本『元至治本全相平話三国志』（中外出版社、一九七六年）および排印本『三国志平話』（丁錫根点校『宋元平

話集』所収、上海古籍出版社、一九九〇年）、『三国志平話』（陳翔華編校『元刻講史平話集』所収、北京図書館出版社、一九九九年）を用いた。また訳書として二階堂善弘・中川諭訳注『三国志平話』（光栄、一九九九年）を参照した。

(8) 呉将与曹璋対陣、交馬多時、不見輸贏。（中略）周瑜亦趕曹璋。璋射一箭、正中周瑜、落下馬来。不是衆人、幾乎捉了周瑜。

(9) 西川の劉璋に対し配下の秦宓が劉備と諸葛亮の危険性を説く場面に、「主公不聞玄徳、前者呉江借軍、使周瑜呉江大戦、夏口救了皇叔。不聞諸葛三気周瑜」（巻下第六葉表）とある。

(10) これらの場面はいずれも正史には見えず、また『平話』のエピソードと比べても大幅な改変が見られる。よって『平話』も含めた従来の三国故事を再構成して練り上げた『演義』独自の筋立てといえる。

(11) 瑜大笑曰、「未及破曹、先占警報耳。」操軍見中央旗折、各有驚忽之意。操心雖不悦、下令云、惑衆者斬、由是軍心方定。周瑜正観之際、忽狂風大作、下観江水、奔濤拍岸、一陣風過、刮旗角於周瑜臉上。瑜猛然想起一事上心、大叫一声、往後便倒、口吐鮮血。諸将大驚、急急救時、不省人事。

(12) ここでの「牧牛村夫」は張飛のことを指しているととらえることもできるが、『平話』の他の箇所において、「牧牛村夫」の語は全て諸葛亮のことを指しており、また直前に諸葛亮が張飛に計を授けて派遣したという叙述があることから、ここの「牧牛村夫」も諸葛亮のことを指していると考えるのが妥当であろう。

(13) 巻中第十葉裏、巻中第十二葉表、巻中第二十二葉裏、巻下第一葉裏、巻下第十一葉表などを参照。

(14) 却説周瑜聴知孔明借東呉力而取荊州、如何不気。気傷箭瘡、半晌方甦。衆将皆在面前勧解。周瑜大怒曰、「若不殺諸葛亮村夫、怎息吾心中怨気。程徳謀可助吾之力。即日起兵打南郡、定要帰還東呉。是我之願。」

(15) 冒頭で述べたように周瑜は呉の草創期における最大の功臣であり、『演義』においてもその点は無視されていない。従って周瑜の劣等性が強調されるのはあくまでも諸葛亮に対してであり、諸葛亮の絡んで来ない場面ではむしろその知謀や胆力が際立てられている。

(16) この点については、小川環樹「『三国演義』の発展のあと」（『中国小説史の研究』所収、岩波書店、一九六八年〔初出は岩波文庫の旧版『三国志』第一冊解説、一九五三年〕）、金文京『三国志演義の世界』（東方選書、東方書店、一九九三年）一〇三―一〇七頁などを参照されたい。

(17) 金文京前掲書三二―三四頁。

(18) 亮早孤、従父玄為袁術所署予章太守、玄将亮及亮弟均之官。会漢朝更選朱皓代玄。玄素与荊州牧劉表有旧、往依之。玄卒、亮躬耕隴畝、好為梁父吟。身長八尺、毎自比於管仲・楽毅、時人莫之許也。惟博陵崔州平・潁川徐庶元直与亮友善、謂為信然。

(19) 『呉書』曰、「堅世仕呉、家於富春、葬於城東。」

(20) 于洪江「試論『三国演義』中周瑜的形象」(『三国演義論文集』中州古籍出版社、一九八五年)、陳周昌「論周瑜和魯粛」(『三国演義学刊』二、四川省社会科学院、一九八六年)、段啓明「論周瑜――『三国演義』人物論」(『西南師範大学学報』哲社版、一九八六年第四期)、井波律子前掲書一六八―一七二頁、土屋文子「『三国志演義』の成立――人物故事の変遷をめぐって――」(『学術研究』〔外国語・外国文学編〕第四十三号、早稲田大学教育学部、一九九五年)などを参照されたい。

(21) 周瑜の逸話が諸葛亮のそれに転化された例としては、『演義』巻十第一則「諸葛亮計伏周瑜」に見られる諸葛亮の十万本の矢集めの話が挙げられる。『平話』において矢集めを行なっているのは周瑜である。尚、ここでいう周瑜の性格の改変や逸話の転化も、史書の記述をふくらませて作ったエピソードの範疇に入るといっていい。

(22) 周瑜大驚曰、「此人如此、使吾暁夜不安矣。為今之計、不若且与曹操連和、先擒劉備・諸葛亮、以絶後患也。」

参考文献

(注に掲げたものを除く)

董每戡『三国演義試論』上海古典文学出版社、一九五六年

沈伯俊・譚良嘯編著、立間祥介・岡崎由美・土屋文子編訳『三国志演義大事典』潮出版社、一九九六年

中林史朗・渡邉義浩『三国志研究要覧』新人物往来社、一九九六年

中川諭『「三国志演義」版本の研究』汲古書院、一九九八年

今鷹真・井波律子・小南一郎訳『正史三国志』全八冊、ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九二―九三年(『三国志』I―III〔世界古典文学全集、筑摩書房、一九七七―八九年〕の文庫化)

張舜徽主編『三国志辞典』山東教育出版社、一九九二年

中川諭・上田望編「『三国志演義』研究文献目録稿」、『中国古典小説研究動態』第四号、一九九〇年
中川諭・上田望編「『三国志演義』研究文献目録稿訂補」、『中国古典小説研究動態』第五号、一九九一年
李福清編「中川諭・上田望之『三国志演義』研究文献目録稿補遺」、『中国古典小説研究動態』最終号、一九九四年
土屋文子「三国故事の変容――〈劉備過江〉故事をめぐって――」、『学術研究』〔外国語・外国文学編〕第四十二号、早稲田大学教育学部、一九九四年